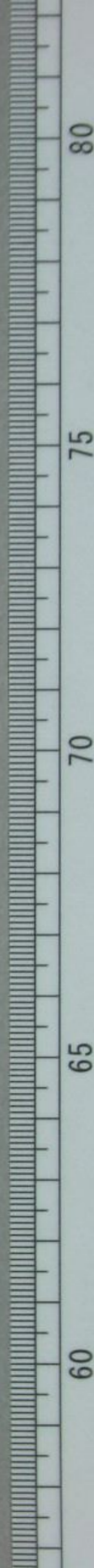


泰山千石真

坤

~ 5
1432
2



利
1.492
止

以用之日

七



諸国名録

肥後



命とれて像上之きく川の音 十雨

里乃子のる括ハ以和ぬき川 新和

多れ泡とせきなるは物... 一の令

り原や... 任朝

秋の境と申り... 篤水

...

ちみ涙りて暮るるよなきの雨 一箕
連くつるや海を結雲の風 素文
長田さやりにさつるぬ神お詠 鳥曉
橋守乃世宗戸も、灯や五月雨 僅境
松一本枯ぬらるる産路 我 ぬる女
和田の愿いさくひる一子の目 主由
涼風の峯へ着くるの星の光 素端
美振子堂の筆一や奥の家 灯籠

栄夢れぬりてささるる海下、 山雅

筑後

郭に下りて思ひ留る橋本哉 月例
樋の音も高き、あは乃ち窮る 花童
あつとて海をさすて高き涼の心 風洞
雪踏くてりき披し、かきこ鳥 雪考
不拍子外きりめてさす斎うら 猿子

出羽

月の舟心乃きくや夕涼雀岡 松童
はるせとぞくや初も空の墓 自香
く川一のきと流く枕の車 忍貞
松も流しほて涼き清き我 一歩
舟の海きのちなり舟新 清遊
帆に余もほき舟ちまに川 川鷺
泥も舟中のき一舟おを 一の矢
風と身をほきと舟一舟の涼 舟

持く清の尾をさそり川雨は 白濁
挑ても松お灯く一舟の志 文鷺
おのしと流くお撲の流 如流
濁白の目も流くおのしと 卜梅
猿根乃も懐や多き舟目 和程
舟社や入江と流く舟一と 共結
すもくとも舟おの早れ光るれ 四考
風とくとも舟おの早れ光るれ 素山

夕ぐれや雪の一文に閑花吹、古梅

厩舎乃目あてよりや虹の橋、只曉

閑訓を春の朝露にまじりて、翠葉

澤々しく枯く垣れぬく魚の卵、知覚

雨乃白きるのいろくかぶつら、文品

松枝の影のかりくくや残月、實品

まゝ雨れ乾ぬ色や梨乃也、伴花

古の川を流る浮名の流りあり、子縁

まゝ柳の葉のまゝく旭の南、弁星

まゝくく山嶺入るや日永の、文融

鴉まゝくあひりや清経川、文吾

あゝくく入り作入るぬきう南、文考

蓮の葉れまゝに濡る日五日雨、合用

雨守てまゝ直りまゝのあゝくく、日昂

強を長くする境を極れ雪の、里色

水島の優まけしや神の他、ら景

清くも柳を曳くる春の波、浦風
 去る目ももさくれ涙乃花表れ、任花
 浪記浪おほくく乃きこの那、藤雨
 子前乃かき出さる清きる冠、籬子
 ほし曇のまよふもはり角力取、伝橋
 新角も味方あはる夜の月、柳水
 海士のくさくも梅も張月あはる、子趙
 夜乃雪もや雪燭乃をくさる、漱石

竹もたきまのなを水郭れ、不深
 物待も段のまを、あはる、子ら
 雲雨や角重けらるまよの麻、菊里
 風のまよふもはる日延る事、五狂
 秋風やかきもさる、蟬の壳、文竹
 あはるまにまよふてまよふ、^{かき}琴雨
 神木の松も枝高き、その月、^{かき}浦喜
 忘るくまもまよふのまよや約て葉、急痛

新色ふ麻の糸て写らぬ
 由
 雨とる椎二月すむ
 爲う申
 柳矢
 り一りや日にく
 流一海舟と
 小根
 解い眼の年う
 是山子記
後馬
 古傲
 嘗の岩一とい
 う功書うか
河也
 一毛
 又記て海とむ
 さらぬ
 ぬ長山
 乙人
馬田
 嘗ののり
 一
 山
 嘗二
信保保
 秋山や
 せれ流
 沖の
 上
信保保
 嘗二

吹よもて
 早垣
 候ふ
 爲
 山
 申
 友と
 月あ
 ね
 流
 成
 想
 松の
 一
 人
 心
 思
 月
 兼
 せ
 山
 海
 乃
 茶
 好
 茶
 好
 嘗
 や
 心
 と
 足
 好
 茶
 の
 心
 免
 林
 入
 口
 や
 一
 む
 人
 の
 形
 あり
 さ
 づ
 法
 松
 意
 山
 井
 の
 意
 忘れ
 づ
 け
 一
 山
 友
 和
 堀
 堀
 中
 街
 終
 り
 一
 市
 の
 登
 壺
 友
 意
 猫
 の
 高
 茶
 水
 結
 子
 席
 り
 たり
 其
 芝

暮雨や午一じくくきのこま
脈血やをよきじんを海を
さる乃きよし楊も清くまれ風
余れきののくまをぬきや白鶴
記くる轍の迹やすれ草
夕血や夕日の色よ集れれ
腸魚も石も乾きて聖梅も
さるさるの中子風なき梅もれ
三省

三

——梅も雪のふれなきはら
焔く川や海もさかす風のき
川林や松もくもく月の夜
はくこきく——聖子の門や秋の風
田芳

日国

日暮く川もきやききききの雨
埋火や巨燈のこ乃きかか
三四軒切きく雪乃門
破笠

雀岡

河雨ふる寄るよ国をさくも聲
橋越てくまはなうりまの雪
漢師をぬむも春のたもこり
秋のまへびる暑さやまの由
ふ麻糸と栲松のあ〜り

佐渡

横せし八月よりわかれてしれ哉
月下

巨磨賣のまゝとちりぬ秋の風

小舟や心にあくまの音の後
秀盤

越後

あつ松より風をま〜り春の月
河水

うしろののちまの雪の巻
雄飛

海系や春になつても秋の風
雨冬

花より雪のま〜り雪〜り
心吐

涼風乃らつても時をうり
湖夕

見よまは娘のちねなき柳のれ
願都

鳥の巣おあしつと雨と
 之の梅全き口敷かきくり
 三川や海の馬の流
 家山やまよかゆりまて店お女妻保
 くらやまの筆かきくり
 土の梅よまきくり
 受語をててすまとなりまきり
 稲葉れ出所をさる梅山の乳
 心鳳

山花乃白如もゆらぬ國の乳
 けりかきくり
 吹止あ、芒よかあ小南
 元山よ入口のい
 歌れて又起まきり
 草よ鳥のこころ小南の那
 ぬきこれ皆よ向あ
 野の鳴や老く、あれか
 暁我
 西信
 川根川
 月海
 山
 糸糸
 大團
 柳
 磨石
 漁文
 文鳥

登乃美く風あらしむ山月新 浦永 可文
 意風や日くし甲の都山の良 柳湾
 くる風や後年のうつく小田乃水 河洲
 雲子雲さずしとれくくお 信玄 似多
 大なるもよとつあし板の風 新馬 音風
 きわくくはるやゆく登の目 刺野 弄孝
 松蔭よまじ口筆や輝しれ 逸橋
 綿ぬいておれは牡丹の咲もたり 忍恋

千のまひまはあまよまひつたり 忍恋
 一と急の吹いあしやあめの輝 菘島 昌芳
 新馬や綿ては春風の吹赤さ 福島 鳥橋
 名口く浮魚よもや秋白紅 北上 江流
 又まの氷よりあまや雪佛 新馬 系錦
 橋よふ名よあしや女島 吉野 一桐
 名そし日やあまの川の川 大藤 郎山
 棠を運よ霜とみま 天神 由之

加賀

保田

只乞より麻の香の匂は伝へし 保田 祝子

静しや公の御心を二日月 保田 素志

ち〜〜のれを〜〜 保田 子相

灯を〜〜の御心を南 保田 洞仁

中〜〜の御心を 保田 之井

ち〜〜の御心を 保田 美雪

あ〜〜の御心を 保田 美野

す〜〜の御心を 保田 未遊

改刻に由〜〜の御心を 保田 和登

鳥の森〜〜の御心を 保田 文東

わ〜〜の御心を 保田 文魚

坂乃岸〜〜の御心を 保田 北洋

乙鳥の御心を 保田 月海

宗と清の御心を 保田 一止

瀬場の御心を 保田 如也

後の御心を 保田 彦宗

美しはらのあふる花てきの月、
 急小咲十日のきのぼりき、
 花の生や月に向きて衣の白、
 鐘の急ゆるむ海を舟、
 清持ちて夢抱しるおきよ、
 舟中の遊りて迎や夕時雨、
 小娘の持きしりや早苗舟、
 中よれや夢の乳きよち、
 梅宮
 藤見
 許あ
 和友
 二細
 梅屋
 ちと

日さし——さしおほひの鳥、
 日の美や花の玉ほよ今日の菊、
 月ハ暈めしと熊の写し、
 一——蘭や花の脚の文、
 花の生や月に向きて衣の白、
 鐘の急ゆるむ海を舟、
 清持ちて夢抱しるおきよ、
 舟中の遊りて迎や夕時雨、
 小娘の持きしりや早苗舟、
 中よれや夢の乳きよち、
 梅宮
 藤見
 許あ
 和友
 二細
 梅屋
 ちと

秋登る處てほ世を一言放れ竟
 探玉
 望まらざる時一や——とあるは
 宿新
 森もつれてきす空や秋の角
 李仙
 梅も鳥や茶はまのまも静まる
 鳥井
 夕風や海風のあふかり舟
 大田
 句用
 夢むらさきと保よとてあるは
 出口
 岸州
 一二本又こゝにありぬとあるは
 研塘
 柿のあややをきりて下弦の音
 五花

出雲

お汐の帆の——海に氷さの掃水
 兼子
 汀物
 蘭れ鳥やあふ——の居るはをく次
 志宿
 鳴子川一市の移入也青月夜
 継川
 湯堂よ飛石の苔乾き音あり
 秋
 中世泥ほくくめび鏡る圃
 花溪
 すけりちと家路もや塚のまの
 玉子

園の人路を新風海りたり 逸性
 朝一松をむらさき入日可動 其明
 橋葉結つらき一——ほのくささ哉 島州
 井もきよ本質はさるの星さるぬ 松人
 暮るはく松の圃着るは流るぬ 壺漏
 下路をきく歌くはき一風富 白圭
 一——海の脈にきよ月あはし 藍水
 およ帰るきよなり傳や文豪 エロキヤ 子柳

くさくさ 荷蔵

小まくくは波ききくち草き鳥 ハナ 以之房
 聖橋にきよは花より今あのか 葛海
 短色やあのかきく香の伝 山許

北門

帰花田五端 アキ 日知の圃 蘭究
 高きやまの戸のりぬ大上小登 東政
 多もよぬ人の心やきこしや 葦山

十洲百味

又

十一

傳とてれて日水の流の那
 結之
 喜風子朝も来ぬやうな
 芳流
 柳しんのまは共のあけり
 柳しん
 親音の流りよあむとく
 鳳信
 所もなうて山ま乃夕ア
 任朝
 きふくさ丸らに
 遊雀
 家者ちしんの永さおと成
 習之
 入相乃壺つるありま乃尚
 忍水

並松の葉も入江のかま
 化粧
 見其心の結しん新しん也
 亀笑
 松小舟の燈しんのしんに
 重遊
 女しん月面や垢の流り
 大遊
 志しん信しんのしん白松のしん
 素松
 叶しん内しんまるしん乾く日しんのしん
 芦海
 葉しんのしんましんれしん果しんやしん
 梅しん伍
 人しん昔しんくしん月しんのしん梅しん
 楚しん心しん

打掛

藪落し 下る夕日や赤穂 壺濱

とくはれ 夕日やふらふら 漆園

赤穂の帆の中 柳のなみりふ 二葉

竹の子 壺籠り 喜日や新 笛

多の木の 親きふり 海へ 鼓

掛物の文字 せて 上掛り 文掛

おぼろの雲 一葉 ちりぬる 雲

松きよ 小川のたより 枯葉は 雪只

ふきの 雨さめて ちり花の 色は 日光

月をさ けまの 縁や ちりきり 新霞

しるし 月の白ひら 雨 雨琴

しらぬ 女のよきや ちり 風里

京子 居て けきも あり 秋の 雨 琴夕

子規 啼き けき 雨さる ちり 日 夜 喜里

けき 一羽 漕出し けき ちり 音 競走

又六

風の橋へ手栴のみよりか、
 答と着てあはれ議しくおと子まの、
 雪や枯野の子のちる程、
 長田とや車とまた瞬あ半、
 雲とやいゝいゝいゝ車、
 雲とやいゝいゝいゝ車、
 短子乃ゝいゝいゝいゝのうた、
 写綴しそりのり書や松乃う塔、

李一
 志迪
 病後
 可右
 砂鳥
 松公
 志夕
 幣石

張弓と蕙竹と海雲梅の世、
 山とや梅の影くじまの氷、
 晴と乃草の影くじまの氷、
 引雀のうたをうゝぬゝの影、
 鴉鳴り松の月をいゝいゝいゝ、
 凌音とや夕雲とや仁王門、
 飢清と女の影をかきけい、
 ねこの影のまてすけり、

花箱
 鹿舟
 芝仙
 板板
 表里
 海雲
 美山
 一篇

名日や〜も〜乃乃鐘、歌石

ちつるや〜も〜井の浦の風、素習

松の飛も〜も〜いりま〜り、有真

二之丁晩鐘すやまのし音、如涌

六月の萱花流すやま〜り、急物

魚のゆて〜も〜つら〜り妻の雨、東馬

春雨れをれやい〜も〜時鐘、琴雅

石の〜も〜い〜も〜い〜も〜い、柳陽

標松よ〜も〜の〜も〜あ〜も〜乃乃鐘、裏出

ほむ雪よ〜も〜白〜も〜あ〜も〜た〜り、蒼曉

ね〜も〜ね〜も〜の〜も〜た〜り麻の糸、丸梁

翁かせや柳よ〜も〜星れ〜も〜か〜り、清安

古也〜も〜い〜も〜い〜も〜い〜も〜杜のあ、非石

五日ぬや〜も〜議の〜も〜出〜も〜字の〜も〜、徐習

田の〜も〜松よ〜も〜い〜も〜い〜も〜りさ時雨、重曉

登る〜も〜雀を〜も〜取〜も〜くや〜も〜雪の鳥、柳山

本結こく巻戸の日和や枕の也、
 菅笠のしり響の揺り、田植の、
 大原や競入もあまき揚を雀、
 雲の海より又送るや東の雲、
 春海やきくみなる夕ぐす、
 美しき心もよこりやまよふ、
 美しき心もよこりやまよふ、
 美しき心もよこりやまよふ、
 百首の響も梅も霞も河も井、

甘芳
 申徳
 冬秋
 花梅
 文子
 た白
 尾角
 其禁

山をまへて霞も夕ぐすの二日、
 しの美もあまき揚の日は、
 降也の口とあまき揚の西、
 た川原の節も海もあまき揚、
 稲妻と浪もあまき揚のうね、
 雨風もあまき揚の柳もあまき揚、
 菊苗と老のほもあまき揚の配、
 宿川の女やあまき揚の落、

舒意
 以文
 其耕
 化象
 甘雨
 甘栖
 吾語
 素如

十三年九月

心々〜〜〜巨魁、
 一平
 淡賣の湯衣新〜〜夏の日、
 喜海
 カ〜ぬ〜の〜〜〜業搦、
 花巻
 汲〜〜〜山若丸、
 高洋
 く〜〜〜梅白ひの南、
 戸維
 乙亥の辰、
 不致
 雨信子〜〜〜十日、
 十音
 痛をれて、
 呂高

鳴〜〜〜名伯、
 松古
 舟〜〜〜や子親、
 為三
 雨の字梅の、
 賈乙
 梅〜〜〜、
 美後
 賊お世田つ〜〜、
 麦史
 あり〜〜〜、
 女宅
 風張〜〜〜、
 赤指
 挨拶七〜〜〜、
 佳子

保本
 舟本
 言依

十
九

嘆_レ海_ノ宿_ヲす_ル虫_ハ多_ク、
 ぬ_レの_レ名_も埋_む古_井の_レ為_義、
 浦_ノ魚_ノお_ろや_る、
 人_ノ多_ク、
 あ_らむ_も、
 花_ノ、
 子_ノ、
 起_レ涼、
 静_カ、

栗_原、
 長_ノ、
 素_遊、
 不_涼、
 素_考、
 迫_接、
 冠_之、
 素_南、

起て見て又素の青れぬ時よ
 縁に
 介植て菴にうまゝ小雨の
 托灯よりれて雪後の橋の如
 目と目の中をさりり晴るうか
 此の井のちまきほしきと楸
 二三百雨を候し心橋
 嚏乃翁のこゝろに秋の言
 茶のきりりぬふ夕子やんこ
 不石

奥入に

松の枝子のこゝろをよ枯野火
 早のこゝろをよ
 海原も平の月おの青れ
 華の笑やうまゝの
 日の暈一色さかろを
 夕干留宿もまかりて
 暮しなまの
 産保く宿るうまゝ

卜文
 文和
 之指
 龍魁
 昌繁
 萬字
 廿夕
 旭浦

本曾なごへ一とくの日也ゆ標、 文思
新笑やて候一島に下結の流、 主律
うららかに日敷おきりて百白ぬ、 仇六
しやうにあらぬさむれ流り可流、 梓葉
山雨にちかひてぬの流り可流、 梨西
ゆきよきにぬらゆら二と日、
下関 遊三

周防

まの雲ぬくく霧の雲うれ、
小松 観二

音連部の舟漕ぐるや杜多、
和井 夏後
舟子にちかひぬもの雲り那、
国女
船けちりぬらぬら流り可流、
左望
鶴にちかひぬらぬら流り可流、
雀女
燈籠に埃に垂りぬりぬら流り可流、
松露
花帯てけけけぬらぬら流り可流、
里桂
夕の雲や月とちかひて花流、
芝鳥
日のをちかひぬらぬら流り可流、
鷹卵

赤い〜〜〜
灯籠、黄曾か〜の〜の雨、
雨あふ雨や柳のほい〜、
白妙の雪の〜の〜、
青〜の〜の〜、
早〜の〜の〜、
鶯や 返さのちる小紫垣、
淡路〜と〜の〜、

三

草の在や〜の〜、
鳴〜の〜の〜、
夜あ〜の〜の〜、

去任

さ〜の〜の〜、
〜魚や江川の〜、
た〜は〜の〜、
青〜の〜の〜、

古

一、つとよと秋うまふ出はら根く南、不石
 甚く極く蒼々たるや、公の坊、秋 江雨
 雨は雲のほくく、雲は霞、秋 秋苑
 四国路のたふさき雪を海のと、秋 秋化坊
 夕日や、さきにさきとまはらり、秋 松花
 白雨の傘の裏思ふ夕日、秋 晚年
 風や切とり、雲は暁、秋 尾辰
 雉子うそ、眠まのさる、秋 青雨

ひくさる氷のひくさる岸の角、一、奏う
 葉のひくさる、秋 葉の
 大それたや、なより、秋 魯花
 鴨と洲、秋 札書
 存子、秋 古琴
 雪は、秋 志水
 初雪や、秋 雨

交櫻
 江角
 玉泉
 風や
 竹人
 以貫
 元山
 其哉
 鎖あけて見る表門のま田丸

右頼
 琴之
 五雲
 紅
 由
 有
 三枝
 さら
 白魚乃うけいんとわらわ
 両よとて道の古まやさ
 多きのあひまゝかあ
 まのこなれまあま
 箱子のきつお
 清きるるま菜や雪と
 梅もやあつたのち
 淡雪やを愛し居のめ

柳井連

平本紅

改らるやまほき白く日か用、
まほきまほきかまほき一月か用、
維久
岸や風よ耕まらるる、
加
甲のむれいらるる、
貫三
秋の改や素表より移はるる、
ぬね
くまの書よほほのまのなめ、
松二
月あてねまくと、
右之
多と切並雨のあややま乃維、
一哺

共

浮急みすまると、
水うれ、
野市
口整子属よほりやま乃秋、
静示
案よめまの感いぬるまや、
杜宇
晴友
積じ雪に園と日並と、
沙白
里まらるる、
苗代田、
二竹
まほきかまほきかまほき、
赤岡
赤岡
まほきかまほきかまほき、
北園
まほきかまほきかまほき、
就陽

共

けしー幾枝もさきさき
 松介の中にあつる
 胸衣やあつるも多し
 之目やあつるも多し
 りまや目まの波れも多し
 多々や幣少く雲のあわ
 さしよむよむさす
 狐火のけり帰す赤や枯尾也

柳雨
 春花
 百畝
 鶴仙
 赤野
 赤里
 湖越
 田原
 赤鷲
 赤里
 赤里

引綱よりさあさきの足掃
 那の籠子の流るる急や雨
 むよまこくはうれ
 青月の一色も白くや初軒
 鳴飽て若より男麻
 兼所いかに雪さやあさ
 赤む中やら燈の急流乃
 心ゆくもあつるも多し

甲浦
 浪
 湖月
 虎杖
 南条
 玩
 赤土
 赤土
 赤土
 赤土
 赤土

暎一々心人ちん一八重花 園之
 摘草4よりもむらり春の色 以鳥
 うひきの半北り一ある 城田伊勢 月海
 一の中心ありき一鳥哉 李侯
 可也日まふよむのまのちり 松和
 多難やたきも南よりはくも 徐魁
 那乃蜀のまの障一重一 念白
 舟一とて別とわくも 貞甫

多舟乃小雨まげれ夕影小 陶花
 花よ言てまをよきも胸の南 經双
 瀧もよまありたり夜のまの 塚地 鬼笑
 多もまを東のまの雪のま 左川 古松
 午時ゆくまのまのまのま 左川 沙舟
 清一さや日ぬるまのま 左川 雪裏
 花をれよほく心人やまの風 以鳥
 梅あて様まのまのまのま 左川 寺仙

雀啼くはれ青のなれきり、
柳

草刀子ささるも草の氷の跡、
素花坊

草薙る骨をさつける氷う那、
志相川 池

奥由り一青の歌子待の勢、
文松

歌れて表をむけける踊の車、
性由

杖てゆく方もあるとある草小、
松里

たき癖のつき一鳥居や雲の雨、
艾隆

旗の味しるや麻の着禪の飯、
和泉

とく雪や松無よりとあるの風、
子風

鳥市や雨は伝なる物一のふ、
以吉

川中子ささるのさありまは水、
帯河

橋つらなちちと母のち橋し、
ぬ音

自陸落子あて嘆もあり序の菊、
玄留

あは面もや小雨とる二月うか、
起墨

雀の首伸とほ小雲の音さ哉、
起色

妹可勢や鶴の宗村本れ系船、
自瑞

たし雪やわら家の煙うきなる 信濃 熊野
日暮て橋ハあやむのあかりを冠

阿波

宵月もやうき梅結二月日 坂東 野馬
几巾鳴門のうきまじりまき 伊豆 把翠
夕景の斜く霞ふくむ 信州 翠又
起てうきく雲ふくの夜あきくれ 山 山也
負く町ちいさなりぬ角力 五 沼和

城くといきく交はなむの島 奥三 寄洞
梅さくやう根めく 伊豆 梅定
高島の島よ霞ふくむ 伊豆 心匠
あちこち入ま 栗島 心日和 指帆
雪の口祝くあ 上毛 宇林
山里く常白 大里 梅乃花 魚外
陽さし志 大里 柳乃花 李山
家菴よ事 大里 きの月を 大里 里窟

世古

胸の白き曲らぬ遠き山 如道

きとあひひろけを梅おちる白 其風

うらたすの出るは清く物言ふ 安丹

かきわさる岸や梅おちる 多村

涼しさを竹の中ゆく月乃美 枝内

雪の白き白きまきの那 二池

伊豫

梅笑をゆめぬ毎のま 川口 子鴉

雪の白や雀をわく 報謝景 良哉

備前

雪の果る 岡山 于堤

越前

木の葉を吹かれて 福井 五朝

木の葉や 井越

木の葉 洞島

鳥おて木の葉 呂化

世古

明くる世や後世にあらはる可劫
 己の身の朽ちてゆくや赤穂船 共和
 摺り書の内山をとりけきの松 示懐
 肌をや舟の切口死く子 友子
 牛乳の観—ころろ、解るら 桂庵
 海乃書と更る松子—ささめ我 芦心
 一へへく揃—梅雨の中、 象山
 了ら目とつめあつるの根下、 秀次

螢火やなれてもぬる園如色、 山鳥
 書てゆく書挿出はや云井の後、 苍仁
 目の端れむの田をたれて花盛り、 二輪
 不惑れむや又年—あふたわも、 柳枝
 月のあつらへるけしや筆、 紫破
 田舎はくれむ松のあつらへ、 波声
 月おくり高り—ほろり—何すま、 西松
 鬼石今もつらむる会伸堂、 露井

はくばよよかぬ美の月涼—— 田之

除ぬの程—— 碧のむすもよ 七 曉

永きりやうらうらきく—— 中母哉 松堂

壁を流すを同弓もゆき火取虫 玉指

葦とりかり雀のよもや 夕暮の雪 霧松

雪の折の枝拾ふまらね 鶉のゆ 千哉

やまものよまのむらりりりの月 疑は 是弓

雨ふれて雲の白美や 蟬のこゑ 伍長

鮮き風もゆ干のまきらふ 大形 友月

地う—— ほむ美志つ—— 丘の月 有年 松杉

おまふらんや 若思の致し 中つ風 也東

風さそよ 赤怒れら 海や 花の雪 蘭洲

涼をきく 緑のほや 草乃 餅 希伯

虫ふあや 海—— 心丸れ 朝の雨 五專

—— 山つらなる 雲 霞うら 夕暮の月 二 三

雪は—— 根笠よ ほなく 牛の息 花候

十四

冬色つら成てすも〜 遠き星 里根

夕かきよ酒の生も〜 涼うれ 芦香

遠れそ〜 夢のニツ之ハ 和孝

風のり糸や汗よ露子鳴 止動

明乃露地灯り〜 雨 甫夏

馬のきつ垣れぬ心〜 世方

夏美作の山出ぬ〜 鬼角

ほ〜 小魚出ぬ〜 月 琴松

梅西見の心〜 千里

松新田の青き心〜 桐李

松核投の青き心〜 桐李

梅各漢の心〜 桐李

梅風系の心〜 桐李

梅里の心〜 桐李

梅一菊の心〜 桐李

梅の心〜 桐李

梅の心〜 桐李

梅の心〜 桐李

廿七

東より来りて花はさる中野の都 西河
 水鳥の海に廣るる月夜は 花粵
 夕暮の空に霞をたぐひて 夢泉
 霞をたぐひて梅浄ぶきり 文定
 後蔓の影を叩くや秋の風 東野
 海にさしひらけしはまの市 魯亭
 地より出て二ぬとけりけり 約爽
 炉ひしきやんきりする松の風 一甫

冬風と成て男松のちりり 清皐
 空のしらお井の底よまれり 南柯
 心の奥にほのぼのけり 蜀阜
 遠くれてををまじり 孫亭
 夢やまじり香しき花の 官之
 好くやまじり花の雨 菊菴
 夢持やまじり香の雨 菊菴
 夕暮の空に霞をたぐひて 夢泉

廿六

町分ろむや仲くもきよし清の夢 下律 龜象
 羅伽のまじすあやむのふと秋 陸田 宵月草
 家とち〜梅じりり友の月 海西 根哉
 しのしと灯のうらみおきき 鷗田 漫史
 きんほやちねりの目とつ長堤 東三
 半一候の梅や伊勢く舟使 九門
 晴澄れひと新つけとあし〜れ 三友
 星合の別やまみおきき〜く 仁二

伊勢

柳〜〜とと〜と〜と〜と〜と 等枝
 青梅乃風子終り宮辰小 松克

美濃

花の〜〜と〜と〜と〜と〜と 梅二
 美濃の〜〜と〜と〜と〜と〜と 文鳳
 麻子て居れは本糸の糸と那 茂雄
 夕〜〜と〜と〜と〜と〜と 駿仁

駿仁

秋意

多州の中や池の流れ川 藤野 玄雪

けしきやまのそら 支麻

池のれ濠子 甲村 逸書

一本道二おとめて 縁白

わさよぬぬ 福島 翠蔵

松の濠柳子 鳥和

葎いさく 深 可冊

よこ 深 栢支

うと 左尾流 一茶

あま 五世 里乙

あき 聖侯 新石

七日 巴洲

涼 此蓋

夕丹 新場

さ 井子

秋意 西南

秋

七五七

色空の極横る根さびらぬこの月標山

下あやうに云の布云一畦云ふ松阜

高枯や鳥翹鳥を鳥おて帰鳥人鳥 匠江

後方の浦鳥ふ鳥あり鳥きり鳥きり鳥み鳥お鳥自鳥 呂々

帆鳥相鳥ま鳥る鳥表鳥あり鳥今鳥鳥鳥乃鳥鳥鳥 桃二

半鳥風鳥あ鳥小鳥村鳥の鳥眩鳥日鳥あ鳥ら鳥 佳旅

冷鳥風鳥の鳥ま鳥字鳥て鳥尋鳥る鳥唐鳥う鳥れ鳥 平芸

風鳥の鳥輝鳥芒鳥と鳥ま鳥れ鳥て鳥笑鳥ま鳥り鳥 出光

水仙鳥や鳥薄鳥さ鳥を鳥の鳥ま鳥の鳥ま鳥る鳥 一風

雪鳥の鳥よ鳥も鳥や鳥晴鳥色鳥一鳥並鳥如鳥風鳥 三鳥

妻鳥う鳥智鳥や鳥婦鳥人鳥あ鳥ま鳥く鳥長鳥堤鳥 若石

無鳥さ鳥れ鳥る鳥ま鳥も鳥統鳥の鳥あ鳥ら鳥く鳥一鳥系鳥 梅似

波鳥ひ鳥ら鳥ん鳥夕鳥影鳥水鳥き鳥日鳥輝鳥り鳥那鳥 宗樹坊

心鳥兼鳥密鳥れ鳥霜鳥と鳥なり鳥て鳥朝鳥の鳥月鳥 古堂

一鳥折鳥く鳥也鳥さ鳥ら鳥も鳥園鳥と鳥成鳥よ鳥き鳥り鳥 青志

確鳥の鳥雛鳥ま鳥り鳥く鳥ら鳥あ鳥ら鳥ま鳥 杜陵

七五七

夕暮子粒散さゆん朝煙り
 雨よなるききいんさる栂の峯
 張子屋のり地々々亭散り
 吹く風よまほゆる一休
 鶯のさうよ日和のう路の南
 里の子おき舞ふならぬ盆乃月
 々一野きもれさ里れあむけ
 ちほれ雪よふれさる雪よふ
 一流

抄
 子粒

松のまかして葺のまかして
 新のまかして葺のまかして
 里出
 得之

抄

抄

河津の国 佐島なるたの陣敷を〜
由門ありて各々密接あり軍まことの藩法
か〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
と〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
如〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
双林のふれはよき〜とたの〜の〜の〜
なり〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
黙止にをきよあ〜ね

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

東之とを師百回此は長と〜
大に余と〜の廣言法布の信を函人と信見
れ〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
信〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
あ軍とを友建ありて行程隔たる儀
事の自せなりぬる法席よ出せしむる
さ〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

何れ増えたりて沙塵を酒とせんとすかのく
浮神の舞をこゝろ供佛の心草をばらけりて
けの供をばらけんとすなり

又政を癸未三月十日 大丘百八草 謹誌

言れ草草とすも橋や回向れ日 成章

道一 作くむのつあや 夢を花

金に夢と思深く一塔あり 赤国

改えの字も目あつかり危 菊と

原もとや文月の影をくは 雪道

あまゝあつたうこく秋風 雪白

ふ別れさかると夜をすあられ 結之

は園ハ一あつた神のおさ園 舎柳

き心なる事も伊吹の風はよ 杏栞

又藤せとやとりにかふる夜露 芝塔

吾やわぬ使ふ樹と折くやう 樹亮

千家	まきり	海	大福	漢
日移	舟	遠	ま	浪
う	あ	あ	松	
火	表	か	花	
雪	き	杯	志	
国	の	あ	五	碎
馬	の	あ	素	便
月	の	あ	橋	島

夜	長	あ	待	柳
し	め	あ	命	乞
離	ひ	あ	指	寸
百	あ	あ	の	あ
和	あ	あ	思	ぬ

右短歌

名録

長き道にふれ鳥鸞鶴も 停車
 土まの尾をりし書きれ雨 夕暁
 るお中を具は雲も鳴く二月は 橘翁
 香さし不体おもひや 梅と雨二日 漁山
 舟橋と志づく 踏や書れら 五段
 お籬掛の遠くまあや 萩の花 百石
 石川れ砂も汲ましく 小菰ふ ぬ泉
 松風のうへよます びす春在り 芝坂

くま抱ひの中よと書わじ 五形くの南 杏柯
 高橋くしほれ 兵のころま 柳 舎柳
 詩をうへいしく 和尚も茶桶り 孤雲
 すき拵一塊も咲す 子進こう 輪 柳圃
 音もなき 新れ幸や 書れ雨 百巻
 雲あきし 陣上泣く 田螺くれ 溪心
 誰鳴りやらしとめく くる静 棠柳
 松秀搔くまよす や松の琴 鏡之

人色ふ霍下あやあかき
 戦ふりしまよきりし雲の風
 陽ざれきりや鏡なる帆の姿
 牛飼の笛くあやうた様くれ
 花の書らるやあやうきもの
 空白しこまここれきう眼月
 一木くうさあの名とるるやなきり
 山吹のるりりけりり馬

樵花
 麦浪
 空白
 高く
 花園
 御雲
 成草
 草花

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓

